

2023年12月10日（日）メッセージアウトライン 「礼拝の民として生きる」

聖書箇所：創世記22：1～12

タイトル：「礼拝の民として生きる」

はじめに：私たちが皆様と共に毎週ささげている「礼拝とは何か」についてあらためて考えてみる。「礼拝」という言葉を聞くと、私たちはすぐに礼拝の式次第や形式を思い浮かべるかもしれない。しかし、私たちが「礼拝とは何か」という本質の部分を忘れて、礼拝の形ばかりに心を向けるなら、私たちは神が願っておられる礼拝から離れて、人間が良いと思う礼拝を自己満足でささげているに過ぎなくなる。私たちの群れであるBICは礼拝を「神お一人が崇められ、聖霊の教えと導きによって心からささげるもの」と定義している。礼拝の真ただ中に、唯一まことの神がご臨在しておられるという事実なくしては、いかなる見かけは立派な礼拝も意味を持たない。同時に、長い間キリスト者がささげてきた礼拝の中には、時代が変わっても、朽ちない礼拝の本質があることも見落としてはならない。今日は創世記22：1～12の聖書箇所から、アブラハムという人物がささげた神への礼拝がどのようなものであったかを見ながら、礼拝のエッセンスを取り出してみよう。それは私たちに礼拝の本質を教えている。

1. アブラハムの捧げた礼拝

①アブラム（後のアブラハム）について（創世記11：11～21章）

- * 偶像礼拝の町カルデア人のウル→ハラン（ここも偶像礼拝の町）
- * 父テラの死後、アブラムは主の声に従って神の示す地に出発（アブラムは唯一のまことの神の命令に従い、このお方を神と信じた）真の神に対する信仰のスタート
- * アブラムには子供がいなかったが、主が彼とサライの間に子を与えるという約束を与えられた時、アブラムはそれを信じ、神は彼を「義」と認められた。
- * 86歳の時——イシュマエルが生まれた。彼は神の約束の子ではない。
- * 99歳の時、主は再びアブラムに現れてサライとの間の子どもを約束。百歳のときイサク誕生
- * アブラハムは偶像礼拝者の中から、唯一のまことの神を信じる者に変えられ、神の約束の子、イサクを得た。

◎唯一まことの神を礼拝の対象とする。

◎この時、神はアブラハムをその信仰により「義」と認められた。

神の前に義とされた者だけが聖い神に礼拝を捧げることが出来るのだ。

②アブラハムへの神の命令

- * 神からの試練——「約束の子イサクを全焼のささげ物として神にささげよ」
- * アブラハムは躊躇なく神の命令に従おうとした。

*アブラハムは神への揺るがない信仰を持って神の命令に応えようとした。(ヘブル 11:17~19参照)

*アブラハムは自分に与えられた希望や願望をすべて捨て去って、ただ神の命令に従おうとした。

パウロの語る礼拝の本質——ローマ12:1

2. 神へのささげ物——神が願っておられる礼拝とは？

①旧約時代のささげ物

レビ記に神への捧げものの詳細が記されている。主なささげ物は動物である。

②新約時代のささげ物

イエス・キリストが約束の救い主として、この地上に人として来てくださり、私たちの罪の身代わりとなって死んでくださったことを信じた私たち自身

③霊とまことによって捧げる礼拝 (ヨハネ4:23)

「まことの礼拝者たちが御霊と真理によって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はそのような人たちをご自分を礼拝する者として求めておられるのです。」

④私たちが神を礼拝する時、携えていくものは？

*自らを神の願っておられる目的のために用いていただくための供え物として

*神への感謝と喜びと賛美を携えて

*自分の手の中にこれだけは渡せない握りしめていたものを携えて

*神が私たちの必要の一切を満たしてくださるお方だと信じる信仰による献金を携えて

⑤どこで礼拝をささげるのですか？

*アブラハムは神の指定されたモリヤの山にでかけていった。

*旧約の民は、初めは幕屋で、エルサレムに移ってからは主の神殿で

*新約の民は、教会で、家庭で、グループで、個人で、どこでも礼拝を捧げることができる。(主の民である教会の兄弟姉妹と捧げる礼拝を疎かにしてはならない)

3. 結論

①礼拝とは唯一の神を信じる者、キリストの御救いに与った者、本来神によって造られた者が、神の前にとるべき継続的姿勢である。

②礼拝とは神の民として神との交わりを喜ぶときである。神の臨在なき礼拝は礼拝ではない。

③礼拝とは神にすべてを明け渡すこと。

アドベントの第2週を迎えて、クリスマスの意味を考える時、神が大切な独り子を与えてくださらなければ、私たちは聖き神の御前に礼拝を捧げるどころか、神なき人生を滅びに向かっていたであろう。イエス・キリストにあって私たちは礼拝の民とされたことを決して忘れてはならない。愛する独り子までを私たちの救いのために捧げてくださった神の愛に応じて、私たちの人生の全てを明け渡して主を礼拝し、お従いして行こう。